

「心を開く」

主任司祭 アウグスチノ 川邨 裕明 神父

神学生時代、初年度の養成は栃木県那須郡にあったガリラヤの家（現在は廃止されました）で行われました。社会人で働いて神学校の門をくぐる人が多いので、一年間田舎暮らしをして学校生活しかも全寮制の生活に慣れるためでした。

ガリラヤの家は、その昔、女子修道院として使っていた家を改装して使っていました。どれほど田舎かという、一番近くの郵便局兼よろず屋的なたばこ屋まで行くのに、「熊に注意」と書かれた看板のある誰も通らない山道を歩いて30分かかりました。喫茶店にはさらに一時間かけて歩かなくてはなりません。しかし、「住めば都」とはよく言ったもので私にとってはなかなか刺激的で楽しい一年だったのです。

平日は、午前中簡単な聖書やラテン語の授業があり、午後には隣にある光星学園（知的障害者の自立支援の施設）にボランティアに行きます。日曜日はこれも隣にある那須教会でミサに与ります。シンプルな生活です。

光星学園では、知的障害者の方がその障害の程度に応じて作業リハビリを行っていました。軽い順番に、畜産（牛やニワトリの飼育）、林業（椎茸栽培）、農産（野菜などの栽培）に別れていました。私は農産の担当になりました。

農産には一番重い障害を持った人たちがいました。作業は難しくはありませんが、ほとんどコミュニケーションを取ることができません。あいさつすらまともに交わすことができません。「こんにちは」と大きな声で努めて明るい声をかけても「…」返事がありません。ほとんど突っ立った人もいます。作業を一緒にしようにも、どうすれば一緒にできるのでしょうか？ 話しかけても反応はありません。どうしよう・・・困り果てました。

その様な状態は二ヶ月以上続きました。同僚の神学生に相談しましたが、他の作業では神学生がしがらまれたりついてゆけなかったり、障害者の方の方がしっかりしているのです。養成担当の神父さんにも相談しましたが、こちらはニヤニヤ笑っているばかりで何のアドバイスもありません。「俺をやめさせ

たいんや」本気で落ち込み、悩みました。これまで、コミュニケーションできなくて困ることなど経験したことがなかったからです。

連休も過ぎ、初夏の日差しが春の訪れの遅い那須にもやってきました。その時は、唐突にやってきました。もう、コミュニケーションなど取れないし、何をやっても無駄、もうやる気もなくした。そんな投げやりな気持ちで、作業場に向かった私。作業場の畑に着くと、なにか今までと違う雰囲気を感じたのです。冬場に重くのしかかっていた雪が、突然崩れ解けてゆくような感じです。無色で重く閉じられていた彼らの瞳に、明らかに色がついたのです。表情が和らぎ、こわばった顔に笑みがこぼれました。はじめて意思疎通できたのです。絶望が希望に変わりました。

今から思えば、慣れない環境の中に放り出され、緊張しこわばっていたのは私だったのです。私の心が解放されたとき、というよりも開き直ったという方が合っていますが、そのとき彼らの心も開かれたのです。その頃撮った写真がありました。懐かしいです。私も今よりはるかにスリムです。それからも波はあったものの彼らと心を通わすことができるようになりました。



心を開く難しさと心が通じる喜びを、体験を通して学びました。養成担当の神父は、すべてを知っていたのです。体験を話すと「そうだろう」と、したり顔でした。